

ねむの木のお留守番。

上杉 啓子 千葉県船橋市 五十六歳

実家の庭にねむの木がある。しなやかな枝に切れこみの深い緑の葉が繁る、美しい木だ。夏の夕方になるとピンク色の羽根のような花が咲き、私は子供の頃からそれを眺めるのが好きだった。

この木を植えたのは父だ。植えたばかりの頃は小さな苗木だったのに、あつという間に私の身長を越えた。追い越されたぞ、と父は笑って言ったものだ。

そんな父も高齢となり、施設に入所することになった。

その半年ほど前のこと。父は終活だといって、突然全ての庭木を短く切ってしまった。私の好きなねむの木も、枝という枝を切り落とされ、心許ない侘しい姿になってしまった。何もそこまでしなくてもいいのにと、私は苛立ち、落胆した。

父にしてみれば、庭の手入れをする人間がいなくなった後を考えた末のことだったのだろう。いたたまれない寂しさが募った。父が入所した後、久しぶりに無人の実家に帰省した。

何となく夜の庭を見やると、ほの明るいことに気づいた。不思議に思っただけで庭に出ると、ねむの花が咲いていたのだ。あんなに強剪定されてしまったのに、ねむはそれにも負けず、また花を咲かせてくれたのだ。あるじがいない間、家を守ってくれていたのだろうか。

夜に灯りをとすように咲くねむを見て、私は胸がいっぱいになった。ゴツゴツした幹を撫でながら、家族でここにいた日々を思い出していた。そして心の中でねむの木に語りかけた。

お留守番ありがとう。これから家を見守っていてね。